

## I 導入部

おはようございます。2026年の3月8日の日曜礼拝です。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。春が近づいてきた予感がしますが、暖かくなると花粉症なるつわものが出現して大変な思いをしておられる方々が多い事でしょう。私も目がかゆくなり、くしゃみ、鼻水、鼻づまりと毎日戦っております。これからも厳しい戦いは続きますが、神様に守られて日々を過ごしていきたいのです。

今日は、受難節第三の日曜日です。ルカによる福音書22章21節から30節を通して、「いちばん偉い人は誰なのか」という題でお話し致します。皆さんが、いちばん偉い人は誰かと尋ねられましたら何とお答えになるのでしょうか。大統領、総理大臣、天皇陛下あるいはローマ法王、会社の会長、社長、校長先生、警視総監、警察署長でしょうか。小さな子どもは、お父さん、お母さんという回答があるのかも知れません。イエス様の時代では、ローマの皇帝なののでしょうか。では、聖書は、イエス様は何とおっしゃっておられるのかを見てまいりましょう。

## II 本論部

### 一、罪人のわたしを最後まで愛しぬいて下さるイエス様

イエス様は、十字架刑に着く前に、12弟子たちとの最後の食事を望まれ、大切な教えをされます。また、ご自分の十字架で流す血、ささげる命を、パンとぶどう酒に譬えて聖餐の教えを示されました。そして、その12弟子の中にはイエス様を裏切るイスカリオテのユダもいたのです。イエス様には、イスカリオテのユダがご自分を裏切ることはすでに分かっておられました。しかし、その裏切り者のユダを仲間はずれにしたり、最後の食事に招かないとか、聖餐の交わりに入れれないとか、11人の弟子たちの足を洗われたけれども、ユダの足は洗わなかったという差別をしたり、無視したり、仲間はずれにはなさらなかったのです。ご自分と3年と少しの間、寝食を共にし、苦勞し、宣教の業に共に預かりながら、特にイエス様の信頼のしるしでもある、会計係の働きを委ねられながらも、師であり、先生であるイエス様を裏切るというとんでもないことをしようとしていたユダをイエス様は愛されたのです。ヨハネによる福音書13章1節には、「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」とあります。イエス様は、弟子たちを「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」とありますが、イスカリオテのユダに対しても「この上なく愛し抜かれた。」のでした。リビングバイブルを見ると、「弟子たちを最後まで徹底的に愛しとおされました。」とあります。イエス様は、裏切り者のユダを愛され、最後まで愛しとおされます。そして、ご自分を裏切る者を暴露するためではなく、ユダに悔い改める機会を与えるために語られるのです。21節、22節には、「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」とあります。弟子たちにとって、イエス様の言葉は、波紋を与え、犯人探しになっていくのです。

23節を見ると、「そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。」とあります。弟子たちは、イエス様の言われた言葉、「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不だ。」と聞いて、イエス様の言葉が自分に対して言われた言葉として受け取った者は一人もいませんでした。みんなが、「おまえか」「おまえなのか」と自分以外の者を裏切り者として疑ったのです。マタイによる福音書26章22節には、「弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。」とあります。25節には、「イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」」とあり、イエス様を裏切るユダ自身が、平然と「先生、まさかわたしのことでは」と言っています。リビングバイブルには、「ユダも、何げないふりをして尋ねました。「先生。まさか、私じゃないでしょうね。」」とあります。イエス様は、ユダに悔い改める機会を与えようとされました。イエス様は、私たちがイエス様を裏切るような言葉や行動をしても、私たちを無視したり、排除したり、仲間外れにしたりはなさいません。むしろ、そのままの私を受け入れてくださり、愛し通して下さるのです。

## 二、私たちの弱さや欠点を知りつつ、なお私たちに期待されるイエス様

25節を見ると、「また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。」とあります。リビングバイブルには、「それが一段落すると、やがて実現する御国で、だれが一番偉いかということで、ああでもない、こうでもない」と議論を始めました。」とあります。12弟子の中のヤコブとヨハネの母が、ひれ伏してイエス様に「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」とお願いした時がありました。聖書は、「ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。」とあります。ヤコブとヨハネに先を越されたことで、10人の弟子たちは憤慨したのです。ですから、イエス様の12弟子の全ては、イエス様の次の位に自分が立ちたいと願っていたのでしょう。福音書は、しきりに弟子たちの会話の中心は、「誰がいちばん偉いのか」ということであったことを説明しています。イエス様の指摘、「わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。」と言われて、互いに自分以外の11人の弟子たちに、指を指して疑ったのです。そのような議論は、やがて「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論」にもなっていたのです。私たちの最も大きな関心ごとは他の人と自分を比べての自分を優位にすることです。弟子たちの関心は、イエス様の偉大な力とカリスマ性でユダヤの国をローマの支配から解放して下さり、イエス様の権威によってユダヤの国に平和が訪れることであり、自分がいかにイエス様の次の地位を得て、特権的な地位が与えられて人々から称賛されるということだったのでしょうか。イエス様は3年と少しの間、弟子たちと寝食を共にし、交わっている中で、イエス様ご自身は仕える者として人々に接しましたが、弟子たちの心は常に人々から称賛されること、人々に仕えられることを切に望んでいたのです。そのような弟子たちにイエス様は語られるのです。25節、26

節です。「そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」リビングバイブルには、「イエスは、この有様をご覧になって言われました。「この世では、王や高官たちが、支配者として権力をほしいままにしています。だが、あなたがたの間では違います。一番よく人に仕える人こそ、指導者になるのです。」とあります。イエス様はこの世では、王や高官が支配者として権力をふるっていると言われました。地位ある者たちは、それなりの権威や力が与えられているので、その力や権力を自分の思いのままに行使するのです。時には、自分の私腹を肥やすために、自己中心のために力や権力を行使するのです。それが世の中なのです。弟子たちも同じように権力や権威を求めました。イエス様はそれを否定したり、弟子たちを叱責するのではなくて、弟子たちの心に寄り添いながら、イエス様は弟子たちに対して、「あなたがたはそれではいけない。」と言われました。そして、「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり」と言われました。この「若い者」と訳されている言葉は、下働きをする若者とことです。リビングバイブルでは、「一番よく人に仕える人」と訳していません。イエス様は、「上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」と言われました。イエス様は、ユダヤ人たちや弟子たちが考えていたような権力と権威をもって、驚くべき力でローマを打ち倒す救い主ではなく、どこまでも人々に仕える者、僕としての歩みでした。そして、全人類の罪の身代わりに十字架で処刑されるのです。フィリピの信徒への手紙2章6節から8節には、「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」とあります。イエス様こそ、一番若い者のような働きをする者、仕える者の姿をとられたのです。ここにこそ私たちの模範があるのではないのでしょうか。イエス様は、ご自分の十字架の死が迫っている中、「自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか」という「人の上に立ちたい」という弟子たちの気持ちを受け止めて下さった上で、あえて、「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」と語られました。そして、今日私たちにも語っておられるのです。

### 三、私たちの信仰の成熟を願い、確信されるイエス様

27節には、「食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。」とあります。リビングバイブルには、「この世では、主人が食卓に着き、召使に給仕をさせます。だが、あなたがたの間では、それではいけません。このわたしが給仕してあげるのですから。」とあります。イエス様は弟子たちにとって先生であり、師であるお方です。食事につく人であって、給仕する人ではありません。けれども、イエス様は弟子たちの中で、給仕する者であると言われました。つまり、ヨハネによる福音書13章で、僕として、奴隷として弟子たちの足を洗われた、あの姿を連想させます。私たちの住む世界は、残念なが

ら、序列というものが生まれてきます。強者と弱者、勝ち組と負け組が生まれます。テレビや映画の内容も、そのような者が多くあります。私たちは、家柄や学歴、社会的地位などを誇りの理由にしてしまうことがあります。けれども、命をはじめとして全てのものが神様から与えられたものに過ぎません。私たちは、今与えられている状況や環境、立場などを神様から与えられたものとして、ふさわしく生きる者でありたいと思うのです。

イエス様は、弟子たちがこの世的な権威や権力を求めてしまうことで、弟子たちを裁いたり、否定したり、ダメ出しをされるのではなくて、かえってびっくりするようなことを語られました。28節、29節です。「**あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。**」リビングバイブルには、「**だがあなたがたは、わたしにふりかかった、さまざまの試練の時に、よくいっしょに耐え抜いてくれました。だから、父が、わたしに御国をお任せくださったように、わたしも、あなたがたにすばらしい特権をあげましょう。**」とあります。「**絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。**」の「**踏みとどまってくれた。**」という言葉は、原文では過去の事だけを言っているのではなくて、これからもそうだ、という表現なのです。この先弟子たちは、イエス様を捨てて逃げてしまいましたが、その後イエス様の復活と愛によって回復し、聖霊を頂いてキリスト教会を建て上げて行きます。そこには、困難や痛みや死が伴いますが弟子たちは信仰に「**踏みとどまって**」歩いていくようになるのです。

イエス様は、弟子たちの権威や権力主義という動機がどのようなものであったとしても、弟子としてイエス様との交わりの中にあること自体を喜んでおられるように思うのです。私たちは、キリスト者としてこの世にあっては様々な戦いがあり、時にはキリスト者としてふさわしくない言葉を言ったり、行動をしてしまうようなことがあるのでしょうか。イエス様のお心を痛めてしまうような言葉や行動があります。キリスト者としての動機に問題があるのかも知れません。しかし、イエス様はその動機がどのようなものであったとしても、私たちがイエス様の十字架を信じて救われた者であることを喜ばれておられるのです。まだ、洗礼を受けてはいないけれども、動機はどうであったとしても礼拝に出席したり、聖書を読んだり、キリスト教に興味を持ったりする人々との関係を喜んでおられるのだと思うのです。私たちは、純粋な動機でイエス様に従ったり、イエス様を知ろうとしていないのかも知れません。しかしたとえそうであったとしても、キリスト教に興味を持ったり、礼拝に出席したり、聖書を読んだり、祈る中で、動機が純粋なものに変えられていくように思うのです。信仰というものは、純粋な動機から始まるというよりも、イエス様を信じて行く過程で、従っていく過程で、動機が純粋なものとなれば、信仰が成熟していくのではないのでしょうか。イエス様はさらに加えて、30節で「**あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。**」と言われたのです。弟子たちは、新しいイスラエルの十二部族であるキリスト教会を治める者として支配権を委ねられたということなのでしょう。それは権力や権威で人々を支配するような支配権ではなく、イエス様に従って仕える者、給仕する者として群れを、教会を指導するということなのです。

### Ⅲ 結論部

イエス様の「**わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。**」という言葉によって、弟子たちはお互いに相手を裏切り者、不信仰な者と批判するという姿は、「**自分がいちばん偉いんだ!**」という子供じみた主張につながっていきました。人を批判するということは自分を相手より上に置くということなのです。この議論は、常に弟子たちの話の中心でした。きっと、その議論はいつもイエス様に聞こえていたことでしょう。ルカによる福音書9章46節～48節には、「**弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。イエスは彼らの心の内を見抜き、一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて、言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」**」とあります。弟子たちにとって、子どもたちは、うるさくて、面倒で、自分たちには得にならない存在でした。イエス様は自分にとって、小さいと思っている存在を受け入れることを示され、最も小さい者こそ、偉い者であると示されたのです。イエス様は、小さい者、弱い者、落ちこぼれている者、嫌われている人、自分が尊い価値のあることを認められない人を受け入れ、ご自分が人々に仕える者、最も小さな者になりました。

イエス様はそのような弟子たちの動機や弱さを見ておられるのではなくて、これから弟子たちがどのように仕える者になって行くのかということを見ておられるように思うのです。弟子たちの弱さや失敗がイエス様の目にはとまらないほどに、弟子たちの価値を、可能性を見ておられるのです。イエス様が「**あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。**」と言われました。イエス様は決して偉い人、上に立つ人を否定してはおられません。それは弟子たちがやがて上に立つ者、偉い人になるということ、つまりキリスト教会の指導者なるということを見越して、語られたことなのです。イエス様は、同じように、私たちの弱さや失敗、問題や罪に目くじらを立てて、目に留めて断罪するというのではなく、私たちが神様にどのように愛され、神様の前にどれほどに尊い存在なのか、やがて神と人の前に低くなり仕える者になっていくであろう可能性を見て下さり、共にいて私たちの信仰を支え、導いて下さるのです。イエス様は私たちの罪が赦されることを願い、ご自分が私たちに代わって十字架にかかり、さばかれ、尊い血を流し、命をささげられた。死んで下さったのです。死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえらされて罪と死に完全に勝利され、神であることを証明されたのです。イエス様の十字架の死と復活を通して、私たちの過去、現在の全ての罪が赦され、やがて犯す未来の全ての罪を赦し、きよめ、義として下さり、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命、天国の望みを与えて下さったのです。

イエス様は、しもべとして、死に至るまで従順だったのです。イエス様は、私たち一人一人を愛して下さり、大切な存在として見て下さり、私たちの信仰の成熟を見て下さるのです。私たちは頑張って、努力して良いキリスト者、きよいキリスト者になるのではなくて、イエス様を見つめて、イエス様を模範として、仕える者、小さき者として、この週も家族や友人、関係する人々の所に遣わされてまいりましょう。